

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成25年 1月23日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 理学研究科

職名・学年 博士課程 2年

氏名 浜 端 朋 子

助成の種類	平成24年度 国際研究集会発表助成		
研究集会名	6th Biennial conference of the International biogeography society 第6回 国際生物地理学会大会		
発表題目	Genetic structure of marginal populations of green turtles nesting in the northwestern Pacific Ocean 北西部太平洋で産卵するアオウミガメ縁辺個体群の遺伝的構造		
開催場所	アメリカ合衆国フロリダ州マイアミ		
渡航期間	平成25年 1月 9日 ~ 平成25年 1月16日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000円	
	使用した助成金額	200,000円	
	返納すべき助成金額	円	
	助成金の使途内訳	航空券(往復)	122,420円
		航空券以外の交通費	15,800円
		発表登録料	2,396円
		参加費	15,989円
	宿泊費	56,254円	
	上記	212,859円に充当	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 遠方で開催される学会であったため、貴財団からの助成なしには参加することができませんでした。有意義な経験を積む機会を与えてくださりまして、本当にありがとうございました。		

成果の概要

京都大学大学院理学研究科
生物科学専攻動物学教室
動物系統学研究室
博士課程2年 浜端朋子

報告者は、京都大学教育研究振興財団の助成を受けて、2013年1月9日から13日にかけてアメリカ合衆国フロリダ州マイアミで開催された6th Biennial conference of the International biogeography society（第6回国際生物地理学会大会）に参加した。

本大会は、二年に一度開催される研究集会であり、シンポジウム、口頭発表、ポスター発表により構成されている。発表分野は、系統地理、海洋生物地理、気候変動に伴う生物分布予測やモデリングの解析まで多岐にわたり、専門分野や対象生物を越えた幅広い議論が行われる。本大会は、これらの分野の研究の促進、研究者間コミュニケーションの促進、若手研究者の育成、生物保全戦略の発展を目的として開催されている。特に、若手研究者の育成に力を注ぎ、シンポジウムでは最先端の研究に取り組む多くのポストドクターによる発表を中心として構成し、博士課程の学生は主にポスター発表を行うことになっている。本大会には、海洋生物の系統地理学について広い知見を得たいという動機に加え、研究対象種を超えて、生物の分布や解析に関して議論することは、自身の研究の視野を拓げる意義の大きな機会となる考え参加した。

報告者の今回の発表は、Phylogeographyというカテゴリーのポスター発表において、「Genetic structure of marginal populations of green turtles nesting in the northwestern Pacific Ocean」という題目で、日本を含む北西部太平洋域のアオウミガメ産卵個体群で観察された遺伝的構造から、分布縁辺付近における個体群の進化的形成過程について考察したものである。今回のアブストラクト集を事前に見た際、複数種を対象とし、大陸単位や地球規模の地理的スケールの大きな研究をテーマとする発表が題目が目立ち、近年の本研究分野における傾向を大きく反映していると感じた。そのため、当初、報告者の研究のように、限られた地域の研究を聞きに来てくれる人は少ないのではないかと心配していた。しかしながら、本大会では、ポスター発表における活発な議論を促進するために、発表時間を2度に分けて4時間近く設けられ、かなり多くのポスターに回るできるようになっていた。そのため予想した以上に、多くの人に研究を紹介することができた。また、保全を考えるうえで、北西部太平洋の個体群をどう捉えるべきか、という点について、議論をすることもでき、非常に有意義な発表ができた。海外で開催される国際学会に参加するのは今回が初めてであったことから、緊張しながらではあったが、他者の発表を聞くことでいくつもの新しい知見を得ることも出来た。そして、複数種を対象とした研究や、グローバルスケールの研究が盛んになりつつあるものの、それらの研究発表を見てみると、元となるデータは、多くのローカルスケールのデータであり、限られた地域であっても地道な調査データの必要性も明らかであった。また、日本を含む東アジアの生物分布のデータは未だ十分とは言えず、多くの研究において解析精度が高くなく、これらの地域でのデータ収集と、そのデータの公開というのが、重

要であることを再確認した。今後も、自身の研究をしっかりと積み重ね、進めていきたいと感じた。

本大会は2001年に始まった若い研究集会であることから、シンポジウム後に、今後どのように発展していくことが望ましいかということについて意見を出し合う時間も設けられていた。今回の大会では、45か国から500人近くの参加者がいたが、多くがアメリカおよびヨーロッパ諸国からの参加者であった。報告者にとって、生物地理的に直接参考となり、共に議論したかったオセアニアやアジア諸国からの参加者は非常に少なかった。この点については他の参加者からも改善すべき点として挙げられ、オーストラリアで研究している米国人の参加者は、オセアニア地域で行われている同様の集会との協力が必要であると提案していた。これまで、その様な集会がオセアニア地域で行われていることは、ほとんど知られておらず、報告者も知らなかったが、今後の情報収集には、そのような集会を視野に入れたいと思う。

このたび京都大学教育研究振興財団の助成を受け、このような国際的な研究発表の場に参加することができ、生物地理学の最新の研究と、方向性を知ることができた。また、多くの研究者と触れ合うことができ、今後、研究を進めるうえで貴重な経験を積むことができた。末筆ではありますが、助成頂きましたことを心から御礼申し上げます。ありがとうございました。